『好色一代男』の地方遊里物の成立経緯（二）

――三ノ五「集礼は五匁の外」を中心に――

島田勇雄

(一)『好色一代男』の成立経緯については、私は独自の解釈法を持っている。それに附随してそれなりの作品論・作家論を持ち合わせていないわけでもない。それは、今は他日の論とせねばならぬ。とりあえずその私の成立経緯論の論点のいくつかを挙げておくことにする。

(ア)「好色」は、大和言葉の「色好み」（『徒然草』『古今著聞集』）の系列のそれであること。これは近来やや通説となりつつあるらしい。

(イ)主人公は世之介ではないこと。これにはまだ多くの人が踏み切れないでいる。それで少し附言しておきたい。

(ウ)作者によって意図された主人公は、当代の庶民の女性を主とするものであること（男娼も含む）。長谷川清氏ら若干氏が同説。

(エ)書き下ろしによって成立したのではなく、既成の転合書の使用によって成立したこと。目下は三次にわたる作業によって成立したと考えている。第一次作業を編集と命名した。それには既成の転合書から素材を集めること、その素材ごとに記憶のために題目を注記しておくこと（それがのちに副題になる）、その素材を一代男型文章・一代女型文章などの一定の文章構造にまとめること、その際要すれば必要な部分を書き下ろしたり適当に改稿したりすること、時に挿絵も画いておくこと、等の作業が含まれる。

(オ)
編集は単章ごとの作業である。おそらくそれによって成立したものについて、数章ごとにある種のまとめ作業や手直し作業がされたこと、それを第二次作業と考え、編纂と命名する。まず編纂方針を設定すること、それでは全体的構想に基づき部分的構想を立てること、それに基づき、前作業で成立した素材についての取捨選択がされること、捨てられた素材のうち一部は巻五で復活し、一部は『諸艶大鑑』で復活する。

(カ)
第三次作業を総編集と命名する。巻五の六章（五ノ二～五ノ七）の増補や全巻にわたる形式的統一がなされたと考えられる。単章のさしかえなどのされたこともあったかも知れない。

(キ)
そのほか(四)でまとめるような成立論がある。

(一)(2)(ア)世之介主人公論については、すでに三十余年前野間光辰氏によって重要な提案がある（『定本西鶴全集』第一巻解説）。

本書は主人公世之介の生涯を主題とした長編小説でもない。世之介は世之介という個体的存在ではなく、世之介という名によって代表せられた多くの浮世男・好色男・当世男の複合的存在である。いいかえれば、無名の多くの浮世男・好色男・当世男が世之介という一つの名を与えられて、五十四章の全部に顔を出しているが故に、あたかも世之介という一人の主人公の生涯を発展的統一的に描いた長編小説であるかの如き錯覚を起させるのである。

野間氏の意図は、世之介は特定の一人の男性ではなく、多くの浮世男・好色男・当世男の象徴的人物であり、したがって世之介は時に浮世男としての顔を表層化し、時に好色男としての顔を表層化し、時に当世男の顔を表層化する。『好色一代男』はそのような主人公を描いた長編小説である、という点にあるのであろう。あえて、主人公の人物形象の不統一とか、それに伴う長編小説としての不統一性とかを問題にしたわけではないのであろう。あくまでも近世文学界の伝統的解釈法に沿った把握である。また、こういう把握もある。

『一代男』の主人公が、世之介であるとは、ある意味では錯覚にすぎない。しかし、虚心に眼をとじてみよう。やはり世之介の像は、おぼろげながら浮かびあがってくるのではないか。その像が完全であるのは嘘だ。しかし像がまったく結ばないというのも正確ではない。（松田修氏『日本近世文学の成立』）。私は、近世文学の非専門家であるせいか、国語学徒であるせいか（国語学専攻者の中では異端の徒で、近世文学徒にすり寄っている方だとは思っているのであるが）、「虚心に眼をとじて」も統一的

な世之介像は浮かんでこないのである。断絶面ばかりが浮んできて、ついでにこの作品の長編小説としての欠陥性ばかりがいきいきとしてきて、困ってしまうのである。たしかに「像がまったく結ばないというのも正確ではない」。私にだって、私流の補完作用によって世之介像を結実させることはできる。しかし、それは私の補完作用の結果であって、この作品の持つ統一性によるものではない。そのことは多くの近世文学徒でも同様なのではあるまいか。それによって全ての近世文学徒が思い思いの世之介像を創立し、思い思いの世之介像に酔っているのであろう。それは世之介像への自己陶酔であり、ひいては長編小説としての『一代男』への自己陶酔である。それは文学の享受ではあっても、それの研究ではない。

(一)(2)(イ)レヴィ＝ストロースは『悲しき熱帯』などの著書で、彼の構造主義がマルクシズム・地質学・精神分析学を経てサルトルの実存主義への訣別のあと、言語学者ソッシュールの方法から構造主義を開眼するに至ったと述べているが、むしろ言語学者ヤコブソンを経てソヴィエト・フォルマリズムを体得していることはよく知られている（磯谷氏「現代思想へのソヴィエト文化記号論の寄与」（『言語学から記号論へ』）等）。その構造主義が各種学界に通じる学術的方法論として地球的水準において風靡していることについて――もっとも、すでに少々色褪せてきてはいるが――今は原子論的方法が構造主義的方法にその主導権を譲渡したとバンヴェニストはくり返し述べている（『一般言語学の諸問題』）。その構造主義的方法の特徴の中で、以下の論のために必要な点だけを摘出するとすれば、次のものが挙げられる。

「たぶん構造主義の方法の最も顕著な特徴は全体の強調だろう」。又「構造は任意の要素の集合であり、その任意の要素の間あるいは任意の要素の部分集合の間に関係が規定されている集合である」。（マイケル・レイン編『構造主義』）。即ち、全体を重んじ全体と部分の相互関係や全体の直接的構成要素としての複数の部分の間の相互関係を重んじる、そういう方法論的特徴は各学界の構造主義に通じる特徴と考えられている。また、ルイ・デュモンが、「全体から出発して部分に到」るという順序を述べているが（『社会人類学の二つの理論』）、その過程で階層構造をなす各レベルでの単位ということも体系とともに重要な特性と考えられている。

その全体ということを長編小説としての『好色一代男』の全体性との関係で考え、その構成部分ということをその主人公とされる世之介やその相関項と考えられる庶民の女性たちとの対比で考え、その全体と部分との関係を相互依存の関係において

把握し、その階層構造ということを長編小説的構造と短編小説的構造との関係で考えてみようというわけなのである。

全体は対象によっては総体とも言われる。特定社会集団の全語彙を私は語彙総体と言うことにしている。その全体とか総体とか言われる概念の内容は、一定の条件のもとに統一されてあるということである。語彙総体とは単語の単なる算術的加算を指示する用語ではない。特定の社会集団の使用語彙として一定の準拠枠のもとに採択された語彙の総体である。同じように一つの長編小説とは一定の準拠枠のもとに統一的に創作された全体であるべきであろう。同時に、全体と部分との関係においては、語彙論的には同一の準拠枠の一貫するものを考えることにしているが、文学論的には同様に同一の準拠枠の一貫するものと考えることにすべきであると考えられる。そのことを『好色一代男』について言えば、まず全体が一定の構想のもとに統一されてあることと、文学作品が言語の線条性によって表現されるという条件からして、少くともその全体の表現におけると同様に、その構成要素も表現における連続性を保持すべきことが挙げられる。文学的には更に多くのことが要請されようが、言語的には最底限それらが思い浮かぶ。即ち、その部分的構成要素としての主人公は、一定の人物形象によって統一的に表現されることと、それが連続性を保持することなどが最低必要条件として挙げられる。

(一)(2)(ウ)その作品の統一性や持続性を具体的に何について論証するのがよいのか、は論の分かれるところである。私はその基準を叙事文の三要件としての時称・所称・人称に求めることにしている。時称は世之介の年齢で示され、目録や本文に示されるが、目録のそれは比較的に完備している。それでも、目録の年齢が、巻五と巻六とで六章分重複することはよく知られている。よく知られてはいないが、本文における世之介の年齢は巻四ノ三章までで、以後本文に年齢は現われない。別言すれば以後の本文は時称を持たないわけで、そうして、目録と本文との乖離が成立するわけである。所称の支離滅裂はよく知られているが、それでも三ノ五～四ノ二は比較的よく統一されている。人称としての世之介では、読者の錯覚の原因は前編（巻四まで）には比較的よく統一されていることで、後編では一転して支離滅裂となる。たとえば四ノ六では世之介は遊びが下手で、遊女に振られる男であるが、五ノ一では一転して遊女吉野の非行というべき行為を是認する粋人と現われ、六ノ二では一転して遊びに不慣れな男として現われる。四ノ七では二万五千貫匁の相続者であるが、六ノ一では遊びすぎして無一文となり、小宿どまり

をする男として現われ、六ノ三では無一文の直前の家だけはやっと残った段階の男として現われるというふうである。これらの世之介が統一性と連続性を持つべき長編小説の主人公にふさわしい人物形象であるとは、私には思われない。したがって私はこれを長編小説には値しない作品と考えたいのだが、近世文学界全体の主潮は、そのような判定を忌避するようである。近世文学界ではそれは意に介するに足りないことらしく、重ね写真説だの変身説だの俳諧的文章説だのが喜んで受け入れられているらしい。それは日本文学史全体、むしろ世界文学全体の中でも特異世界を形成しているが、そのような判定を納得するのが近世文学理解者であり、私如き判断を持つのは素人と言うことらしく、右の如き判定は素人の一人よがりとさげすまれるものであるらしい。

(一)(2)(ヱ)右のことから『好色一代男』は長編小説としての資格を欠く作品であると私は考えるが、この作品のいま一つの階層構造としての短編小説集としての性質においても決して完全なものでないことについては、一ノ六や二ノ一・五ノ五などについてしばしば述べた。たとえば人称について言えば、二ノ一では主人公世之介は、導入部では男色の対象適合性を持つ十四歳の少年であり、本文前部の前ジテとしては男盛りの遊び好きの男性であり、男娼の客となり、本文後半ではワキになってしまって陰存化する。後ジテは男娼である。それらのことを一代男型文章構造・一代女型文章構造という客観的文章構造との関係において述べ、『一代男』の短編的性格では、世之介は夢幻能におけるワキ僧、「諸国一見の僧」の変身にすぎず、本文後半の後ジテを導入するための動機付けの機能を持つワキ役的人物にすぎないと考える。しかし近世文学界全体は、そのような合理主義的な解釈はあまりお好きでないらしい。古典のパロディとか俳諧的文章とかという解説がはびこる、古典コンプレックスの世界である。私には、近世文学を世界文学の中に位置付けるなどには興味がないようにさえ見える。なお、『好色一代男』の、非長編小説性や短編小説集性・世之介非主人公論等については、あらためて機会を求めてより精しく述べることにしたい。そのほかにも言及しておきたいことは多いが、それらも別の機会に譲ることにする。

(二)(1)『好色一代男』の地方遊里物を副題との関係から三分類した。それらは「大臣遊び型」「道中立寄り型」「豪遊型」と命名した。副題によって三分類したそれぞれが、右の如き命名を可能とするような章群に分かれるということは、副題と本文との間に相関関係のあることを意味するものであり、それは私の推

測の、転合書からそれらの章群の素材を摘出し、それぞれを独立した一章として編集し、それらに記憶のための標題を附記したこと（それが『一代男』の各章の副題となった）がほぼ同時期であったなどの正しさを証明するものであろうと考えている。そのことについては、すでに「大臣遊び型」については既述したので（『近代』四七号）、「道中立寄り型」について簡単に述べておきたい。この型の章は次の如くである。

巻・章	本題	副題
一ノ六	ぼんのうの垢かき	兵庫の風呂屋者の事
三ノ二	袖の海の看売	下のせき遊女の事
三ノ五	集礼は五匁の外	越後寺泊り遊女の事
四ノ一	因果の関守	信州追分遊女の事

「大臣遊び型」や「豪遊型」に共通することは地方遊里の件が各章の本文後部における主題となっている点である。それに対比して、「道中立寄り型」では、世之介の立ち寄る地方遊里が世之介の旅行中の一事件としてチョッと立寄る箇所として本文前部において扱われることを共通点とすることにある。各章の本文における地方遊里の重要度に大差があるわけである。即ち、一代男型文章は次のような文章構造を持っている。

章首――承接・導入

本文前部―前提的設定部

(ア)世之介が旅に出ること

(イ)その結果世之介が後ジテに出合うこと

本文後部―主題部

(ウ)後ジテ中心の叙事・解説

章末――終結・連接

一代男型文章構造では、世之介が明らかに実在するのは本文前部のみであって、本文後部では世之介と名乗る人物はほぼ不在である。主人公と言うものは作品中で中心的人物として行動するものというのが常識的理解であるが、世之介にはそんな側面はない。しばしば述べたように、夢幻能でのワキ役としての「諸国一見の僧」は前ジテとの問答が終り、シテの登場への動機づけが終ると、舞台の上手に坐り込んで最後まで動かない。世之介の機能はそれと全く同様である。世之介は後ジテの登場のための動機付けという機能だけを与えられた人物にすぎない。それなので、その動機づけのために必要な最低限の人物形象を各章ごとに与えられる。そのために全章を通じると、世之介の人物形象は支離滅裂になってしまう。本来それを統一的に認識しようとするのが誤りなのである。それなのにそのような形象を寄せ集め、それぞれの補完作用を大量増補して作ろうと、世

之介主人公論者は苦心惨憺という状態である。私にはそれがひどく滑稽に思えてならない。私の文学観からすると、そのような人物は、長編小説的視座からも、短編小説集的視座からも、主人公というに決してふさわしくないと思われるからである。世之介主人公論の支持論の現われるたびに私は混乱し、自信をなくしたり、時には近世文学者の文学観をうたぐったりしてみるのである。

ところで、「道中立寄り型」では本文前部の(7)の項として、世之介が旅に出て目的地に向う途中に地方遊里に立寄るという形式で、地方遊里を紹介する。一ノ六では、須磨に立寄って海女と一夜を共にして行平を思いやり、三ノ二では、下の関への途中一夜を共にした鞆の浦の遊女に誓紙を書かせる。三ノ五では、佐渡の金山への途中舟宿りのついでに寺泊りの遊里に遊び、四ノ一では、塩釜からの脱出の途中信州追分の遊里に旅寝する。そのような形態で世之介の旅の趣向に変化を加え、ついであまり重要でない地方遊里を紹介する。それで、「立寄り型」は本文前部における世之介の旅に伴って現われる。それをこの類の特徴として命名したのである。

しかし、それらの章では四章中の三章において、あらためて地方遊里が素材とされる。一ノ六では、兵庫の風呂屋者、三ノ二では下の関の遊里、三ノ五では寺泊りの遊里がその対象となる。四ノ一だけは獄中で知り合った人妻が対象となり、やや例外となる。その三章の後部は手直しされたものかとも考えられる。一ノ六では、須磨の海女の件と風呂屋者との件の間に兵庫の遊里の件があり、三ノ二では同じく鞆の浦の遊女の件と下の関の遊里との間に小倉の看売の件が挿入されている。筋立てからすれば、本来不要な部分であり、多くの読者は無視するがそれでもよい。しかしこれらは原拠としての転合書の形態の残存したものと思われるので、転合書からの摘出を論じる際には無視してならないものと考えているし、この種の夾雑物の存在そのものは書き下ろし説を批判する材料となるし、また本文における多くの不備・矛盾の存在とともに本作品の編集者たちの編集方針を論じる際の有力材料となると考えられるのである。

ところで、右の三章では本文後半に、一ノ六では兵庫の風呂屋者、三ノ二では下の関の遊女、三ノ五では寺泊りの遊女がそれぞれ素材となり、それが副題に示されている。副題と一章の素材との関係では、本文後半の素材を副題とするのが正しく、したがって本文前部において立寄った信州追分の遊里を副題とする四ノ一は例外とすべきであるし、それは本章が多くの例外的記述・構成を持つことと合わせ考えられる。四ノ一を例外と

すると、実の所副題の一致と本文前部の道中立寄りとは直接的関係はないと言うことになる。それはそれとして、本文の成立上ではこれらの四章に相互関係の認められる点があり、これらを一括することはそれなりの意義があり、副題の一致を惹起したのは全くの偶然というわけではないことが分かる。

(二)(2)一ノ六の本文前部の須磨立寄りの部分と、三ノ二の鞆の浦の件とは、もと同一の転合書の「中国筋物」の記事中の一部を摘出し、それらを分割して利用したものであることを述べたことがある(『一代男』における中国筋物について(『解釈』一九ノ一))。そのことのほかに、立寄り部分と本文後半の素材との中間に、兵庫の遊里と小倉の着売りとの夾雑物が混入していて転合書の原型を偲ばせる要素のあることは右述した。それらのあとで、一ノ六では風呂屋者の小宿ばいりの件、三ノ二では下の関の遊女の件が本文後部の対象となるわけで、それとの共通要素からしてこの両章が本文成立上に特に密接な関係のあること――おそらく成立の時期、経緯を同じくするものであろうこと――また第一次の編集による成立であり、以後ほとんど手直しを受けていないであろうとの推定を下しうることが考えられる。

それに対比するに、三ノ五と四ノ一とはやや事情を異にする。この両章では本文前部の構成に大異が認められるが、本文後部では甚だしく類似していて、三ノ五の後部の影響によって四ノ一の後部が成立したのであろうことなどについて述べたことがある(『好色一代男』の三ノ五と四ノ一の類似性(『解釈』二九ノ一))。三ノ五の影響で四ノ一を大増補したため、本作品における一事件・一年・一章の原則をくずして二章分となり、その後半が現在の四ノ二となり、そのためもと四ノ二に位置された章が四ノ三に後退し、時間的矛盾が生じたと述べたことがある(『好色一代男』成立の経緯(二)(『文学』四二ノ二))。三ノ五の後部も四ノ一の後部も、ともに田舎者の流行おくれを笑話的に素材にしたものであり、ほぼ同じ内容の事態を少し趣向を変更して再使用する方法は、矢数俳諧における西鶴自得の方法で、『一代男』でははすは女・木偶恋しなど多用されている。即ち、一ノ六と三ノ二とは第一次作業の形態をとどめるものか(前頁下段三行目参照)と考えられるのに対し、三ノ五と四ノ一とは第二次作業としての編纂時の手直しを受けたものと考えられる。

(三)(1)一ノ六と三ノ二との相関関係を具体的に述べれば、次の如くである。まず、両章の本文前部に当たる「中国筋物」の部分である。一ノ六では、月に誘われて須磨をと志し、和田の岬・角の松原・塩屋を経て(地理的誤りあり)、海を見渡す小屋に宿って、京より持たせた銘酒の樽の口を切って飲むほどに酔うほ

どに、一夜といえど女なしには肌淋しく（御年十二歳である）、若い海女を招いてとも寝、その磯くさきにつけて行平のいにしえを偲ぶ、という筋である。三ノ二は小倉の人に誘われて小倉に下り、ついで下の関に行ってその遊里に遊ぶという筋立てであるが、その小倉までの道中では、鵜殿野・神崎等を経て鞆の浦の遊里に一宿し、その遊女に誓紙を書かせる、などのことがある。地理的にはまず三ノ二の神崎から一ノ六の須磨の段へ、ついで三ノ二の鞆というふうになるのが自然である。即ち、京都から小倉への紀行文のうち、須磨の段を一ノ六に、残余を三ノ二に分割使用したと解すると、典拠はうまく説明できるし、文体的にも矛盾はない、と言ってよい。西鶴の創作技術の分析には好都合な部分である。

〔三ノ二〕火の当見に。小倉の人。のぼられしに。此里の花も。おもしろからず。誘ふ水にまかせて。鵜殿野の芦も。まだ笹に見なして。旅のこゝろを。書つゞけて行に。左に天野川。磯島と。いへるにも。舟子の瀬枕。しのび女の有所ぞかし。右の方は。西行仮の舎りと読れし。君の跡とて。榎の木。柳かくれに。わびしき。一つ庵のこせり。同じ汀つゝきに。三島江という里も。昔しはうかれ女の。すみしとなり。なを行末に。神崎中町に。しろど。白目などいへる遊女の出し所也と。みぬ昔日も。なつかしく。浪は次第にあらく。しほさかいより小早に乗うつり。風うれしく。

〔一ノ六〕十三夜の月。待宵めい月。いづくはあれど。須磨は殊更と。浪霧元に。借りきりの小舟。和田の御崎をめくれは。角の松原塩屋という所は。敦盛をとっておさえて。熊谷が付さしせしとなり。源氏酒と。たはふれしもと。笑ひて。海すこし見わたす。浜庇に舎りて。京よりもたせる。舞鶴花橘の。樽の口をきりて。宵の程はなくさむ業も。次第に。月さへ物すこく。一羽の声は。つまなし鳥かと。なを淋しく。一夜も只はくらし難し。若ひ蜑人はないかと。有ものにまねかせてみるに。髪も指櫛もなく。只に何塗事も知らず。袖ちいさく。裾みちかく。わけなふ磯くさく。こゝちよからさりしを。延齢丹などにて。胸おさえ。昔し行平何ものにか。足さすらせ。しんきをとらせ給ひ。あまつさへ別に。香包衛士籠。しやくし摺鉢。三とせの世帯道具まで。とらされけるよと。

〔三ノ二〕備後の国。鞆という所にあがり。名にきゝし。花鳥八島花川といへる。髪長を。定もあへず。そこ〳〵に寝て。何かたるべし。恋のもと末もなく。夢もむすばすありしに。日和見に。起され。（略）

原転合書の使用に当っては、若干の捨象があったと考えられるし、一ノ六の書き出しの如きは、前文の末尾を承けて書き下ろしたものと考えられるように、実際の使用に当たっては文脈の整合に配慮したための操作が若干あったとは考えられるが、既成の転合書の巧妙な使用が工夫されたあとを見ることができる。このあと、一ノ六には兵庫の遊里の件があり、ついで風呂屋者の件に及ぶ。三ノ二では小倉の看売の件がある。一ノ六でも三ノ二でも同一の紀行文における連続部分であったかと思われる。

〔一ノ六〕又の日は。兵庫迄来て。遊女の有様。昼夜のわかちありて。半夜と。せはしくかきり定めるは。今にも此津は。風にまかする身とて。舟子のよび立つる声に。小歌を出さし。或は載て。さし捨にして行は。こゝろのこす人は。のこるべし。

何とやら忿々しく。是によころゝもと。すぐに風呂に入って。名のたゝば。水さしますなとゝ。(略) 其もてなし。何国も替る事なし。

〔三ノ二〕行に程なく小倉に着て。朝げしきをみるに。木綿かのこのちらしがたに。茜裏を。ふきかへさせ。どしの帯前結ひに。平帯ふとくすべらかしに。結びさげ。盤切の。あさきをいたゝきつれて。我からぬらす袂。まくり手にして。浮藻まじりの。桜貝。鯖いとより。馬刀石王余魚。取重て。大橋をわりて。おもひ〳〵に。道いそくをきけば。是なん。此所の看売。内裏小島より出る。たゝじやうと申。(略)。

小倉の看売は本章の展開には無関係であるが、本章の本題「袖の海の看売」とあり、また挿絵にも画かれる。右の文の続きに売色をほのめかす辞句があるので、須磨の海女に似た趣向のあったものかと思われる。それにしても、一章の展開上にほとんど意味を持たないと言ってよい看売の件を本題とし、その挿絵を添えた意図は何なんであろうか。諸国の珍談・奇俗を素材とする『諸国話』の興趣がすでにひらめいていたのであろうか。

この両章では、右述に続く本文後部で、地方の売色の紹介に及ぶ。一ノ六では、兵庫の風呂屋者が客に招かれて小宿に至る描写であり、三ノ二は下の関の遊里の遊女たちについての紹介である。前者では風呂屋者の外出の件が唐突であり、説明不足であるが、そのことは編者も気づいたものと見え、『好色一代女』で同じく風呂屋の件について構成した章で『一代男』の一ノ六に踏まえた展開をしながら、外出の理由を補足している(『好色一代女』と『好色一代男』との相関関係(一)『甲南国文』二八号)。(三ノ二の遊女遊びの件など、『一代男』の構想上の展開

からすれば、本来不自然な章である。二ノ六で世之介はすでに勘当されているし、三ノ一で再確認している。勘当されたほどの者を旧知といえども遊興に誘うなどとは当時の風習としては許されぬことと言ってよいからである。(三ノ六も。同一章群である)。このような設定の章の存在こそこの作品の基調的性格を示すものと言える。そのような例外的な現象は、ことに地方遊里物に見られ、しかもそれが散発的ではなく、むしろ統一的・規則的と言ってよいことのなかに、私は地方遊里物の成立上の機微な経緯を感得させられるのである。

㈢(2)「道中立寄り型」の四章のうち一ノ六と三ノ二とは、その構成法の点で、(ア)中国筋物を分有すること、(イ)本文前部と本文後部との間に一種の夾雑物としての本文を持つこと、(ウ)本文後部に地方の遊女の紹介記事を持つこと、(エ)副題の型を同じくすること、の四点からその成立上の時期や経緯を同じくするものであろうと考えられる。また、この両章は本作品の成立の第一次作業としての編集作業の段階に成立し、その後の第二次作業の編纂作業の段階には、ほとんど手直しを受けず、したがってほぼ第一次作業の形態をとどめていると考えている。ただ、一ノ六は世之介の幼年期の章群に続く章で、その章群の修辞上の統一事項が明らかでないが、三ノ二の所属章群では本文中に世之介の名を挿入する統一方針があり、それにしたがっておそらく後に栖の浦の段の末にその名を挿入したものと思われ、その位置が他章と違いいごこちのあまりよくない箇所にある。おそらくそれが編纂の際の手直しの一つであったかと思われる。

その両章が、ほぼ一次的作業としての編集時の形態をとどめるであろうと推定する根拠は次の如くである。二次的作業がどのような経緯で計画され実現されたかについては、まだ十全な成案を得るに至っていないが、各章の表現等についての細部的統一的分析の結果、一次的作業としての編集は各単章についての実現であり、二次的作業としての編纂は複数の章群についての実現であることが結論された。即ち時称・所称・人称・導入部の有無等を中心に細部的分析を試みるに、叙事文の三要件や導入部の設定等の文章構造上の重要機能部や素材の種類集め等において明らかに意図的な集団的特性の結実が看取される。しかもその章群の集団的特性は一定せず、章群ごとに変容を遂げており、それらの軌跡を追求することによって編者の創意のあとや関心の変遷を追認できそうなことを知ることができ、それから章群単位の成立順位も推定できる。しかも各巻に散在する地方遊里物が、それの所属する章群の統一方針に拘束されながら、しかもその全体に共通する独自の集団的特性を保持すると

いう複雑さも認められる。それらのことを綜合的に判定する解釈法として三次に亘る作業段階を考え、それぞれ独自の固有の作業を実現したと考えるに至ったわけである。しかし、本稿の根幹は十年前の論攷において、現作品には素案において成立した章と、修正案において成立した章とを含む、と述べたものと（「好色一代男」成立の経緯(一)(二)(三)（『文学』四一ノ一二・四二ノ二・同四）、同じくそれ以前に地方遊里物について述べたもの（「好色一代男」の成立についての一試論—地方遊里物の一類を中心に（『近代』四七号））とに基づき、若干の修正と、視座と方法とを異にする内容分析とを意図するものである。なお、かつて修正案と述べたものが、今の編纂と総編集との、二次的作業と三次的作業とに分類されるし、それぞれの作業内容も相違すると考えている。

一ノ六と三ノ二との両章がほぼ一次的作業の形態をとどめると推定する根拠として、次のことが挙げられる。第一に、編纂による章群単位の統一事項の拘束を受けたと思われるものが、三ノ二の「世之介」の名のほかには考えられないことが挙げられる。第二に、接近する文脈上の矛盾の見られないことがある。文脈上の矛盾は、手直し等の作業の際に生じるが、その例の二、三を挙げれば、

〔二ノ四〕(ア)（略）其夜は客なき事を。さいはい。口舌に約束させて。更行迄さしわたし。かしらから。物毎しらけて。かたりぬ。

(イ)所ならいとて。禿もなく。女郎の手つから。間鍋の取まはし。（略）あひ床をきけば。伊賀の上野の米屋。大崎といへるを。四五度馴たる。あいさつにて。（略）

〔四ノ一〕(ウ)（略）なを胡散者也。重而せんさくすべしと。ひとやに入られ。思日の外なる。難義にあふ事。天罰たちまち。身にあたりぬ。朝夕の暮しも。公儀のめしとは。悲しく。はじめの程は。目もくらみ。泪にしずみ。前後もしらずありしに。

(エ)奥より。十人の計の声して。今入の小男。籠屋の。作法にまかせ。胴をうたすと。立かさなる。貌は。色くろく。髪ながく。両眼にひかりあつて。そのまゝ。世界の図に。見し。牛鬼島のごとし。左右に取つき。手玉につきて。（略）

二ノ四では、相床もいないので、と述べているが、次に相床の米屋の挿話が入る。これは既述のように二つの素材の組合せによって一章を編集したために生じた現象である（「好色一代男」の二ノ四の成立（『解釈』二七ノ八））。四ノ一では、後述することでもあるが、三ノ五の示唆から田舎者の所作についての趣向として獄中生活を大増補したために生じた文脈上の違和である

(『文学』四二ノ二)。(ウ)では、入牢以来多数日を経過した記述を持つのに、(エ)では一転して入牢当日の記述に復帰する。そのような文脈上の非連続・転換は後日の大増補のために生じたものと考えられる。四ノ一では冒頭でも手直しがあり、その手直しも既成の文脈を改訂せず、単に増補する方式を採用している。全ての編纂時の手直しが同様の方法のみによったと断定してよいかには疑問があり、文脈を全的に改稿したはずとの推論があってもよい。しかし、私には他の例、一ノ六の須磨の段と兵庫の遊里との接続部の如く、編者にはきわめて簡便な方法の採用による文章構成法を多用するという傾向の存することを考慮して、両章における文脈上の矛盾の存在は、これらの両章が編集段階の形態をとどめることを表わすものである、と現段階では考えることにしておきたい。

次に、その推定の第三は文体である。その文体では、須磨の段・兵庫の遊里や、小宿行きの段・勝山の段のそれぞれ相互には小異が見られる。それは本章が各種転合書からの小断片の接合編集によって成立するためであるが、たとえば須磨の段の内部では文体上の断層は見られないと言ってよい。その他の段についてもほぼ同然で、それぞれ文体上の統一を保持していると言ってよい。『一代男』に使用される文体は多種多様であり、そのことは作者が多種多様な文体を持ち、素材その他によってそれらを随時適宜に使用していたためと言ってよいと考えられる。即ち書き下ろしの時点を異にすれば、その種の作者では文体を異にしがちであるので、のちの手直しが加われば、内的調和に違和感を生じがちであるが、この場合それぞれの段の内部ではその種の違和感の感得されないのは、本質的な手直しを受けなかったためであろうと思われる。もちろんこの種の論証には稿を改めねばならぬであろうと考えている。

次に、その推定の第四は場面の展開法である。未完成の展開法の残存は、それが初期の形態をとどめることを証明する。たとえば、一ノ六の第二段落から第三段落への展開である。秀句好きの明朗な風呂屋者と一夜の約束をとりきめ、風呂屋者が小宿へ出掛けるくだりである。いきなり「風義は云云」と風呂屋者の外出描写に始まって、なぜ外出するのかの説明はない。作者の説明不足なのであって、欠陥表現である。風呂屋者の売色は多くの場合当該家屋でなされると考えていたので、私などには意外であった。この件については井上ひさし御推薦の吉行淳之介口訳『好色一代男』には、原文のまま口訳されてある。しかし、西鶴自身はさすがに説明不足と気づいたのであろう、『一代男』の一ノ六に基づいて構成した『一代女』五ノ二の湯

女の項では、外出理由についての説明を加えてある。そのように場面展開の鍵になる重要な説明を欠落させていることは、この章の初期性を示すものと考えられる。なお、右に相当するものを三ノ二には思い付かない。

以上の諸項を総合的に考慮すると、右の両章はほぼ編集段階の形態をとどめるものと考えられる。しかし、三ノ五と四ノ一との両章は事情を異にすると考えられる。

㈣(1)道中立寄り部分が、三ノ五は他章に対比すると、やや差異がある。四ノ一の信州追分の遊里に見られるように、立寄った遊里の描写は他章では簡略に終るのを常とする。それは本来世之介の旅行についての趣向上の変化を表わすものに過ぎないからである。ところが、三ノ五では、遊女の服装描写と言い、家屋の室内描写と言い、きわめて精細に亘り、『一代男』全章におけるそれらの描写の中で最も精細なもので、西鶴のそれらの描写の展開の中での最終段階的描写を表わすものと言ってよいほどである。また、その文章構造も、通例の一代男型や一代女型とは違い諸国語型と言ってよいような新構造を持している。それに挿絵に道中脇差を差した二人連れを画いてあること、本文中の同行者が祝義の大盤振舞いをすること、その二点は同行者が近在の舟宿の主人であり、地理風習に精しい者であれば、実現の可能性の少ないことなので、他章にも見られるような北国辺の者が北陸辺でも旅する途次の立寄りなどが三ノ五の一次作業時の形態であり、現形態は四ノ一と同様に第二次作業の形態をとどめるものではないかと推定される。四ノ一についてはそのことの論証を早く提出した(「好色一代男」の成立経緯㈡『文学』四二ノ二)。三ノ五についてはおくればせながらいまその推定を提出したいのである。

㈣(2)三ノ五と四ノ一とは、私の編纂による章群の分類では同一章群に所属する。したがって編纂による手直しが実現するときには、同一方針による手直しを受けることになりやすい。むしろ両者に見られる素材上の共通要素からある種の統一方針が着想されるということになりがちであり、そのためひいては類似の手直しを招来することになりやすいと言うべきかも知れない。

四ノ一の編纂作業時の大増補のことについては既述した(『文学』四二ノ二)。その増補の基調的要因としては編纂方針による統一的改稿の必要性があり、内容上の直接的要因としては三ノ五の改稿の示唆による、趣向上の変容事項の増補の着想があったと思われる。考慮された編纂方針の根幹は、それまでの編集が、各章の独立性が強く、短編小説集的傾向が濃厚であったのを改め、長編小説性の強化を自覚的に実現することにあっ

たと思われる。それの具体化として、まず各章の章首に導入部を設定し、それに前章の叙事の結末を承ける辞句を添えることによって前章への承接を明確化すること、時称としての世之介の年齢表現に季節表現を加えて、時称表現を一層精緻化すること、所称としての世之介の行動領域の連続化をはかること、などが著しい特徴で、以後修辞法にも一段と磨きがかかって、単なる辞句のパロディ的表現から描写技法の変異の配慮へと展開する。

その帰結として四ノ一の冒頭部は次のように手直しされる。(イ)が増補部分、本来は(ア)から(ウ)へ連続したものである。

(ア)年八卦の。あふ事。かならず疑ひたまふな（略）二十八の年は出来心にて。人の女をこひて。一命浮雲く片輪に成程の事有ぬべし。兼てつつしめといへるを何をか申事ぞ。胡敬なるはとのかいめと。なんでもなふ聞捨

(イ)しに少もたがはず。此身に成こそ。不思議なれと。剌落されしあたまを隠し。遠近人に。あふも。愧しく。

(ウ)信濃路に入て。碓井峠を過。追分といふ所に。遊女と名付て。色のあさ黒きをみがき。木賊かる山家者を。（略）旅寝の一夜をあかし。曙はやく道いそくに。

(イ)は前章の叙事を承けるという方針で、増補されたもの。改稿せず、増補による手直しの方法を採ったわけである。このように解釈すると、「二十八」は二十七の誤記とする通説が無用となる。二十八の時人妻に恋することは四ノ一の本文後部にあり、そのため一命も危険になる件は、本来は本章の眼目であったのであろうが、本文部の大増補のため四ノ二の本文前部に後置されたことになる。そのように解釈すれば、冒頭部の難問は一件落着となる。

四ノ一の本文後部には(ニ)(2)で述べたような文脈上の齟齬があり、獄中描写の件が大きく増補されていることが知られる。その文脈では、(オ)が増補部分で、本来(エ)から(カ)へと連続したものと考えられる。即ち、

(エ)朝夕の暮しも。公儀のめしとは。悲しく。はじめの程は。目もくらみ。泪にしづみ。前後もしらずありしに。

(オ)奥より。十人計の声して。今入の小男。籠屋の。作法にまかせ。胴をうたすと。立かさなる。（略）

(カ)明り取の。狭間より。隣をみれば。やさしき女有ける。あれはと。尋ければ。（略）

以上、四ノ一の手直しでは、第一次作業による既成部分をそのまま残存させ、新たに増補を加えるという方法を採用したことが知られる。その種の方法は、他の章群で章首に導入部を増

設するとか世之介の名や年齢を統一的に加えるなどの作業のなされるときなどによく見られるもので、その増補事項に合わせてその他の改稿も同様に行なうなどのことをしなかった。そのために六ノ二の章頭で、「六人ながら」とあるべきところを旧態を存して「五人ながら」とするなどの矛盾が生じている。『一代男』に多い矛盾・不備にはそのようにして生じたものが多いと考えられる。

(四)(3)三ノ五は四ノ一と同じく同一章群に所属する。両章の異同については、次の点を挙げた(『解釈』二九ノ一)(甲は同、乙は異)。

甲(1)本文前部が道中立寄り型であること

(2)本文後部が田舎者揶揄の内容を持つこと

(3)世之介の名を欠くが、その年齢表現はあること

乙(4)四ノ一は四ノ二を伴い、同一素材が例外的に二章にわたること

(5)四ノ一に同伴者のないこと

(2)についてはこういうことである。三ノ五では、隣室で六七人の声がして同じ歌をくり返しているので、亭主に聞くと、近頃上方からさざんざという小歌がはやってきてあの通りと言う。それは昔のはやり歌、近頃はやる柴垣踊を知ってるかと問うと、知らぬと答える。興ざめがし、その他遊女の所作などにあきれて早立にするという筋。四ノ一では、入牢直後の新入りいびりの際、同じく新しい流行歌のぬめり節を歌うと皆きょとんとしているが、昔はやった松原越えてを踊ると大喜びするという筋である。両者は西鶴新発見の技巧としての同一趣向の変異を使用するという方式である。(『好色一代男』の俳諧的文章と一代男型文章『文学』四八ノ八)。これが『諸国話』の「蛍の籠ぬけ」に再々利用される。

右述の如く、三ノ五と四ノ一とには多くの類似点があり、両章が同一章群に所属することからそれらの間には密接な相関関係のあったことが考えられる。叙事の素材については、三ノ五と四ノ一との着想は時を同じくするものと言えるが、『諸国話』の浪人の件は四ノ一を経由せねばならぬので、やや後発と言ってよいかも知れない。次に、三ノ五と四ノ一との趣向を同時期のものと認定するとしても、三ノ五の手直しの方法はどうであったのかが、私には問題である。即ち、それは四ノ一の如く旧文脈を存して、部分的増補にとどめたのか、それとも大きく改稿したのか、という問題である。これについて吟味するに、四ノ一の如く旧形態の残存と推定させるものは全く見られない。それで、大きい改稿を行なったために、三ノ五には旧態残存の

あとが認めがたいのであろうとの推定を持ったのである。しかし推定の根拠はそれだけではない。

四(1)で述べたように、『一代男』の各章に現われる修辞法を技術的変遷という視座から整序した観点が第一にある。第二に文章構造を同様の視座から整理した観点がある。これらからは、四ノ一その他に見られるような、隣接文脈の連続を至極軽度に計量したにすぎないための辞句の挿入とは異り、全面的な改稿を実現することによって可能とされるものであるために、四ノ一に見られるような表現上の矛盾・不備を生じることはない。しかし、同時にそれらが西鶴の修辞技巧上の高度化に基づくものであることの証明をせねばならぬわけであり、それは同時に『一代男』の全体的章群成立順序・各章の成立関係についての論証をも前提とする。その全体作業の成立経緯としては、編集・編纂・総編集の三次に亘る作業のあったことはくり返し述べた。しかし、修辞技法と文章構造との種類については既述したが、その変遷順序については十分述べていない。それは各章の成立順序に関する論との関係で、別に述べる意図があって触れないでいるのである。他日、稿を改めて述べるつもりである。

それで、今は結論だけを述べる。たとえば女性の服装描写について言えば、『一代男』には若干の類型が抽出できるが、簡単な型式が初期のもの、複雑な型式が後のものと言ってよい。それはいわゆる会話文の類型についても妥当するし、固有名詞の用法についても妥当する。その他の描写技法についてもほぼ同様の現象の存在が見られ、したがってそれらの技法上の高度化は、一次的作業の残存と見られる章よりも二次的作業の結果と見られる章に多く現われるし、成立順序の早いと思われる章よりも成立の遅いと思われる章に多く現われる。西鶴の表現技法との関係では、目下の所私はそのように把握している。そのことは文章構造の類型についても同様に考える。『一代男』には一代男型文章構造が最も多く、一代女型文章構造がそれにつぎ、諸国話型や万文古型は稀である。そのような文章構造の類型が、それを基調とする作品の成立順序に同じいことは面白いことである。

そのようなわけで、その種の客観的論証は実施していないので、これは目下の所の結論としては、右のことを操作的方法によって論証帰結した帰結に過ぎず当然それにふさわしい限定的効力を持つにすぎないが、三ノ五の修辞法（遊女の服装描写・室内描写等）や文章構造は『一代男』中の最も精緻なものであり、作品中の最後期の技巧であり、文章構造も同様であるが、それはこの章が編纂段階の章群の一であることと、編纂段階の章群

の成立順序としても遅い時期のものと考えられることと矛盾しない。そのようなことを論拠にして、三ノ五は編纂段階に大きく改稿された章であろうと推定する。即ち、編纂段階の手直しには三ノ五の如く大きく改稿されたものと、四ノ一の如く旧態を存して、それとの接近的文脈の調整を顧慮しながら増補を行なうのにとどめ、結果的には一章分の増加という異例の現象を招来したものとの二法が存したことになる。

(四)私の『一代男』成立論は現在の所、大局的には三階層に分かれ、それぞれまた複数の段階に分かれることになる。まず、

甲全体的成立論——成立原理

編集——一次的作業——単章単位

編纂——二次的作業——章群単位

総編集—三次的作業—全体単位

乙中間位層成立論——章群相互の成立順序

名称型

年齢型

(名称＋年齢)型

丙各章の成立関係論——特定単章(他作品を含む)の相互関係

という三者である。甲については、編集説は古くからの提案であり、三次作業論は最近の結論で、編集説以外の説明はまだ十分実現していない。したがって、乙は全く提示していない。丙については若干を随次述べている。未提案部分については、あらためて述べることにするつもりである。